

市道の愛称

問 市道に、市民が親しみやすい愛称をつける考えはないですか。

答 市内の徳森地区から大洲農業高等学校に向けての市道田口徳森線は、現在国道56号の代替もしくは通勤、通学など生活道路として、なくてはならない機能をなしている基幹的な道路です。

このような道路に愛称を定めることは、道路に親しみを持つていただくこと、地域が道路に愛称をつけることでコミュニケーション活動の活性化、そして市民だけでなく市外からの方々にも分かりやすいまちづくりにつながるものと考えています。

これまでには、街路事業により整備したJR大洲駅を起点とする道路を「ふれあい南通り」と命名し、広く市民に親しまれているところ です。

今後については、田口徳森線など市内の幹線的な道路やまちづくりの観点から愛称を付すことが適当な路

線については、公募により名称を選考したいと考えています。主要な道路に愛称を定めるに当たっては、植樹、修景施設、歩道などの道路環境などを一体的に整備することによって道路に対する愛着や理解を深め、利用者にとってわかりやすい道路整備に努めたいと考えています。

鹿野川湖周辺整備計画

問 2017年のえひめ国体に向けた鹿野川湖の周辺整備をどのように考えていますか。

答 カヌー競技会場となる鹿野川ダム湖については、選手、監督、大会関係者のほか一般観覧者を含めると、1日当たり1,500人から2,000人程度の参加者が訪れると見込んでいます。

現時点では、左岸側に選手村や実施本部などを配置し、大会関係者を集約、右岸側に観覧席を設け一般観覧者を集約することでそれぞれの人の流れを分離し、

鹿野川湖



混乱を防ぐよう考えています。

駐車場については、風の博物館駐車場、大駄場ふれあい広場を利用するほか、ダム工事に伴う残土処理場を駐車場として利用させていただくことを国に要望していく考えです。

観覧場所については、右岸側の遊歩道約400メートルを利用することで考えていますが、湖面を見渡せる箇所が限られているほか、仮設スタンドや仮設トイレ、さらには物産販売所等の店頭を設置する必要もあるため、十分な面積が確保できない状況です。このた

め、国体時の利用のほか、国体終了後の肱川地域振興の観点からも遊歩道の延長について国土交通省とも協議・検討していきたいと考えています。

当市では初めての国体開催となりますが、全国からお越しただく皆様を笑顔とおもてなしの心を持って温かくお迎えし、大洲市に来てよかったですと感じてもらえるよう知恵と工夫により魅力あふれる大会を目指したいと考えています。

循環バス「ぐるりんおおず」

問 循環バスの利用実績、運行に係る収支状況をどのように判断、理解して補助を行っていますか。

答 平成21年1月11日の運行開始から平成24年までの利用者の推移では、平成21年は3万5,561人で、1日平均97人、平成22年は5万8,033人で、1日平均159人、平成23年は7万1,553人で、1日平均196人、平成24年は7万4,896人で、1日平均205人という状

況であり、利用者は年々増加傾向になっていきます。

運行の収支差し引き額と補助金については、利用者が増加した平成24年の実績により収支状況を分析すると、現在の運賃水準では極端な利用者の増加が見込まれない限り、毎年400万円程度の赤字が見込まれるものと考えており、車両等が老朽化をした場合にはその維持更新費用が必要となるため赤字額は一層増加するものと考えています。

市民の交通手段として定着している「ぐるりんおおず」は、既になくてはならないバスとなっており、継

ぐるりんおおず

